

アート & テクノロジー東北 2026 講評

2026 年 7 月 11 日(土)、今年度も無事、「アート&テクノロジー東北」発表イベントを開催することができました。本イベントは、会場の広さからも大規模な集客を行うものではなく、展示者同士の交流を主な目的としています。数年前まではコロナ禍以降における対面開催の再開・継続という状況の中で、集客の問題から継続開催に不安もありましたが、昨年度は小規模ながら展示者・来場者ともに熱気に満ち、非常に活気のあるものとなっていました。今年度もそれに引き続き、参加された皆様のお陰で会場内は大いに盛り上がっていました。多すぎず・少なすぎずのちょうどよい混み具合で、展示時間の最後まで非常に充実した熱気が保たれていたことが印象的でした。

審査の結果、最優秀賞となったのは「Relational coral」(筑波大学大学院 知能機能システム学位プログラム 干川未来さん)です。本作は、触れられることを嫌い、ひとりでは色を失って白化する 5 体の珊瑚オブジェクトによる群体インタラクションと、VR ゴーグルを通して集まってくる魚を見ることができるシミュレーションを用いた総合的な作品です。観客が「触れず・急がず・そばに置く」ことで色を保つという発見を通して、人間関係や共生のあり方、過剰な干渉やつながりの欠如を静かに問いかけようとする作者のメッセージ性と、時間の経過に伴う美しい変化の表現が見事に融合しており、高く評価されました。

優秀賞には、「天に投映地に三味線」(青森大学ソフトウェア情報学部 倉知哲平さん)、「We all are (not) creators」(中部大学人文学部メディア情報社会学科 助教 石川達哉さん)、「Visual Augmented 花札」(日置市地域おこし協力隊 一倉弘毅さん)の3件が選ばれました。

倉知哲平さん自らが演じる「天に投映地に三味線」は、津軽三味線を用いたインタラクティブなプロジェクションマッピング作品であり、伝統芸能と現代的なデジタル映像演出との融合が高く評価されました。次に、「We all are (not) creators」の作品は、AI によるリアルタイムのフェイスモーション・ポートレートを通し、一見エンターテインメントのような面白さが際立ちますが、プラットフォーム上の定型化された発信フォーマットに依存する現代の「創造の不在」を体験として鋭く突きつける概念的な深さが評価されました。そして、「Visual

Augmented 花札」は、伝統的な花札「こいこい」にスマートフォンからのリアルタイム投票システムを組み込み、役の倍率や得点配分がその場の合議によって動的に変化するインタラクティブな遊戯体験への再構成を提案しており、さらに視覚的な仕上がりの美しさも大きな魅力となっていました。

審査員特別賞には、「はるちゃんのあったかごはん」(作家 よしたけなつきさん、横浜美術大学美術学部講師 大町秀太郎さん)、「Parallel Marchés」(筑波大学大学院 デザイン学学位プログラム 及川佳乃さん)、「声をカタチに」(大正大学表現学部 草場琉那さん、坂本悠羽さん、山中羽さん、遠藤夢果さん)、「Don't look Back. 圧覚提示型感情増幅 VR 体験」(岩手大学理工学部助教 三上拓哉さん)、「Exceed Zone 4」(八戸工業高等専門学校 産業システム工学科電気情報工学コース 佐藤僚亮さん、舘里緒さん、小笠原雅延さん、平野淳弥さん、小山田零鳳さん、細川靖さん)、「Metronoid」(札幌市立大学デザイン学部教授 藤木淳さん、キンミライガッキ現代支部代表 坂田亮一さん)の6件が選ばれました。

二人の役割分担で構築された「はるちゃんのあったかごはん」は、食材カードやおもちゃを非接触リーダーにかざすことでアニメーションが展開され、直感的な操作で食育や創造性を育む親子向けインタラクティブ作品です。次に、「Parallel Marchés」は、特殊メガネの有無によって見える屋台(マルシェ/シェルマ)が変わり、情報デザインの違いによる「強者・弱者」の入れ替わりを体感させる野心的なインスタレーションです。そして、「声をカタチに」は、一人ひとりの声の個性や感情をリアルタイムで視覚化し、「自分の声を見る」という新しい体験を提供する作品です。「Don't look Back. 圧覚提示型感情増幅 VR 体験」は、自作のカフ(腕帯)デバイスを用いて圧覚を制御し、VR空間での恐怖感情を物理的に増幅させる独自の試みが光りました。「Exceed Zone 4」は、ハンドル・ペダル・シフトレバーを自作した自動車走行シミュレータであり、実際の車体のような操作感をUnityによって完成させたところが評価されました。最後に、「Metronoid」は、外部音入力とロボット同士の音量ネットワークによって不規則なリズムを刻み、「自律生命的楽器」という新たな楽器のあり方を提示した作品です。

学部学生以下が対象となる奨励賞には、「だーくねす♡あくあまりん」(八戸工業高等専門学校 産業システム工学科電気情報工学コース 仲山陽大さん、白石

光さん、熊野りおさん、七崎幾斗さん、舘悠介さん）および「flied 飯・fly（フライパン フライ）」（八戸工業高等専門学校 産業システム工学科電気情報工学コース 赤坂東真さん、佐々木千櫻さん、杉本慎之介さん、長谷川隼也さん）の2件が選ばれました。

さらに海外特別賞として、「Tic-Tac-Toe game」（Mongolian University of Science and Technology, BATBAATAR TSOGUCHRAL さん）、「Fear」（Design Department, Mongolian university of science and technology, Badamkhand.B さん）、「Why do the seasons change?」（Design Department, Mongolian university of science and technology, Tugsbileg さん）、「Spring of the stars」（Design Department, Mongolian university of science and technology, HUVO さん）の4件が選出されました。

今年度の出展作品全体を通して、最先端の AI 技術やセンシング、VR デバイスを導入した作品から、身体性や伝統・人間関係というアナログなモチーフをデジタルへ昇華させた作品まで、多種多様なアプローチが見られました。技術の高さだけでなく「何を体験させ、何を問いかけるのか」というメッセージ性が強い作品もあり、アート＆テクノロジーの領域が持つ表現の幅広さと可能性を改めて強く実感させられ、国境を越えた多様な視点やクリエイティビティに触れられる機会となりました。

最後に、受賞者の皆様には心よりお祝い申し上げますとともに、素晴らしい作品で会場を盛り上げてくださった参加者の皆様に深く感謝いたします。また、惜しくも受賞には至らなかった作品についても、それぞれに強い可能性や独自の熱量が込められており、今後の更なる展開を楽しみにしております。この度は「アート＆テクノロジー東北 2026」へのご参加、誠にありがとうございました。皆様の今後のご活躍を心より期待しておりますとともに、来年度のご応募も楽しみにお待ちしております。

2026 年 7 月 11 日
岩手大学人文社会科学部
教授 本村 健太